



オランダ

派遣期間 2012年4月～2015年3月

ロッテルダム日本人学校 帰国報告 ～オランダ人の気質と教育に学ぶ～

石狩市立石狩小学校
教諭 田中 孝治

1. オランダの概要

(1) 国名

オランダ王国

英) Kingdom of the Netherland

蘭) Koninkrijk der Nederlanden

俗) Holland (スポーツの掛け声など)

(2) 国土

面積) 41.867 平方km

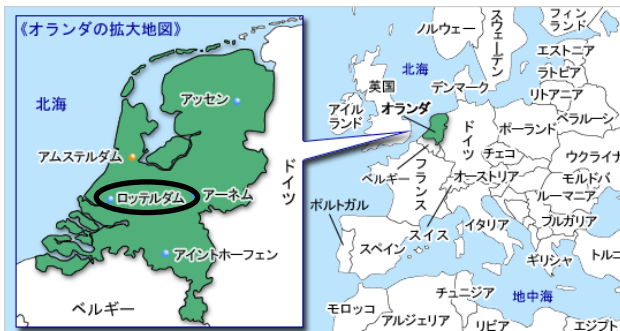
(およそ九州とほぼ同じ面積)

海拔) 最高地点=322.5m

(国土の1/4が0m以下)

緯度) 北緯52.3度

(樺太とほぼ同じ緯度)



(3) 言語

公用語) オランダ語

オランダ語は、英語とドイツ語の間にある言語とされており、オランダ人の9割が英語を話せると言われている。

(4) 王制

国王) ウィリアム・アレキサンダー三世

2014年に母親でもある前ベアトリクス女王から王位を引き継いだ。即位式の日には、

国中が王家を象徴するオレンジ色に染まり、王位継承が祝われた。



2. 日本との関係

(1) 国交の始まり

1598年に、5隻のオランダ船が日本を目指し、ロッテルダム港を出港。外国船などに襲われるなどした後、デ・リーフデ号の1隻のみが1600年に大分に漂着した。ここから、日本とオランダの交流が始まっている。

(2) 朱印船貿易～鎖国

江戸幕府の初代将軍徳川家康は、漂着したオランダ船に興味を持ち、乗組員のヤン・ヨーステンを心から歓迎した。さらに、幕府相談役の地位を与え、航海術を学んだり、西洋諸国に関する情報を集めたりもした。

1609年には、幕府から朱印状が発行され、平戸(長崎)にオランダ商館が設置され、本格的な通商関係が始まった。プロテスタント系のオランダ人は布教を目的としていなかったため、鎖国後も200年以上にわたって、日本が交流する唯一の西洋国となる。開国後の1858年、オランダと修好通商条約を締結し、正式な外交関係を樹立することとなった。

3. オランダの教育事情

(1) 教育の自由

『設立の自由』

一定数以上の生徒の就学を確保することで、学校の設置が可能

『理念の自由』

宗教的・非宗教的な教育理念による教育の実践が可能

『教育方法の自由』

教材や教科書・学級編成なども自由に選択が可能

上記の3つの自由が憲法で保障されており、公立・私立ともに同じ国庫補助金が受けられる。

(2) 教育制度

①初等教育…4～12歳

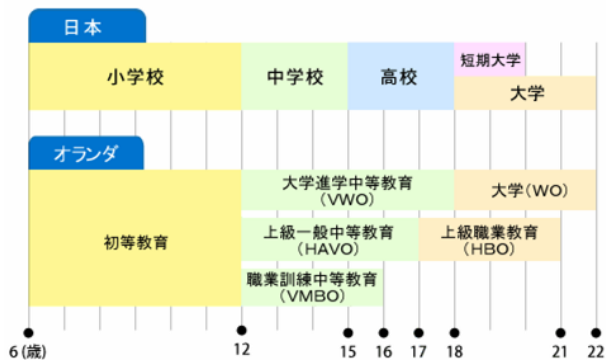
基本的な学力を身に付けることをねらいとして設置されており、通学可能な学校から自由に選択することができる。

②C I T O (全国共通学力診断テスト)

初等教育の最終学年(日本の6年生時)に行われる。C I T Oテストの結果と日頃の成績をもとに、本人・保護者・教師の3者で話し合い、次の進路を決める。

③中等教育…3～6年間

中等教育へ入学後、2年のブリッジクラスという進路変更可能な時期を経て、「大学進学クラス」「職業訓練クラス」「専門学校準備クラス」に分かれていく。



(2) オールタナティブ教育

オランダでは1970年代に、いじめや学力の低下などが問題視され、新しい教育＝「オールタナティブ教育」の必要性が叫ばれるようになった。教育の自由が保障されているオランダでは現在、様々な教育理念を掲げる学校が設立されている。

【主な教育プランと特徴】

モンテッソーリ教育

実際に手に触れることのできる具体的な教材の活用し、異なる年齢の子どもたちを1つのグループにして指導を行う。



イエナプラン

先生を含めて、クラス全員が輪になって話し合う時間を、1日に日課に



何回も選定し対話型の授業を行う。教室では、5～6人の年齢の違う子が小グループを作って教え合う。

ダルトンプラン

子どもたちが、小さい時から自立的に学習できることを重視し、その日、その週、その月にやるべき課題を生徒と教師が契約して学習を進めていく。



【時間割の選択】



すな遊び(図工)

空いている学習教材にマグネットを貼り、自分で学習内容を選択していく。

(3) 選択とやり直しのシステム

オランダでは「学校がとても好き」「友達の関係がとてもよい」と答える子どもが多く、子どもの幸福度調査では、オランダは第2位となっている。自己肯定感も非常に高く、たとえば「英語を話せる?」というアンケートに対しては、8割以上のが「話せる」と回答した。ところが、実際の英文法のレベルでいうと、日本の中学生とオランダの中学生では同程度の子も多い。

これらの幸福度と自己肯定感の高さは、家族と共に過ごす時間が保障されている社会制度と、「選択」と「やり直し」のシステムが確立しているオランダの教育に、その一因があるのではないかとされる。

小学校では、低学年の時から時間割や学習進度を子ども自身で計画していく。学習方法も子ども自身が「選択」し、自力解決をしていく教育課程が組み立てられているため、学年が進むにつれて進度の遅れや学力の差も生まれていく。しかし、進度や習熟の遅れが出た場合にも、「やり直し」のシステムが各段階で確立している。実際には、小学校

での留年の制度や中等教育でのブリッジクラスなどがあげられる。

小学校での留年は、学校側からのアドバイスもあるが、基本的には保護者と子どもで決めることとなっている。家庭においても、子どもによる「選択」を重視しているため、留年する場合には、子どもの意向が反映されていることが多いという。中等教育では、ブリッジクラスの2年間に、自分の進路をよく考えた上で、進路を変更することが可能となっている。大学などの上級学校への進学は、卒業が資格となっているため、必要な学力差へ身につければ、基本的にはいつでも進路が変更可能となっている。

これらの制度について現地校の教諭に伺うと、「どちらも、一見回り道に見えるが、自分の進路を自分でしっかり考えた結果を学校はもちろん、保護者も尊重しているし、まわりの子どもも自然とその子を受け入れている。進路を選択した子ども自身も、引け目を感じることなく、自分に自信をもてるようになる。」とのことだった。

オランダの教育では、「選択」させることで自主・自立を促し、「やり直し」の機会を保障することで自己肯定感を高めている。そして、これらが、子どもたちの幸福度の高さにつながっているのではないだろうか。

4. ロッテルダム日本人学校

(1) 概要

①学校目標と目指す児童像

「豊かな国際性を身に着けた

21世紀に生きる児童・生徒の育成」

②児童数(2014年度)

全校児童…28人

小学部…22人 中学部…6人

③授業の様子



日本の学校と同様の教育課程が組まれている。また、学習に対する保護者のニーズは高い。

(2) 学校行事

①運動会

「在オランダ日本人合同運動会」として、オランダ全土の日本人の児童生徒を対象として、行われている。ロッテルダム日本人学校は、全校生徒で「和太鼓」と「踊り」を組み合わせた表現を発表している。



②学習発表会

小学部と中学部がそれぞれ、劇と音楽の発表を行う。地域に住む日本人やオランダ人の方々も楽しみにしている行事となっている。



(3) 外国語教育と交流活動

①外国語教育

英会話

週に4コマ(1コマ=20分)行われている。アメリカンインターナショナルスクールや現地校との交流とも関連させながら、実践的な英会話を学習する時間となっている。

オランダ語

現在の学校の設立条件として、オランダ語が必須とはなっていないため、現地理解教育の際に必要な実践的なオランダ語を、行事ごとに学習している。



『ハーリングレッスン』

ニシン(ハーリング)漁の解禁日に合わせて、屋台へ活〆ニシン買いに行き、ロッテルダム流の食べ方で旬のニシンを一気に口に頬張る。



学習や総合的な学習で学んだことを生かしなが
ら、心温まる交流を重ねている。



老人ホーム訪問

毎年近所の老人ホームを訪ね、お年寄りとの交流を行っている。優しく接してくれるお年寄りの方のおかげで、交流に対して安心感を持つようになる子も多い。



③現地理解教育

自然教室

宿泊学習と修学旅行を兼ねて、オランダ北東部に位置するテクセル島へ1泊2日の日程で訪れた。



社会見学

動物園やユーロポートなどの現地の施設やオランダへ進出している日本企業への見学を通して、オランダへの理解を深めている。



【シャトレーゼ工場】

【ゴードのチーズ市】

④交流での課題と実践

勤務時のロッテルダム日本人学校では、外国語教育や交流活動に対して、後ろ向きな態度を見せる子どもたちが少なくなかった。

子どもたちや保護者への聞き取りを行い、原因を探ると以下の4点が浮かび上がった。

②交流活動

AISR

ロッテルダム日本人学校では、校舎を共有しているアメリカンインターナショナルスクール(AISR)と交流を重ねている。

行事での交流以外にも、算数や体育など教科を通じての交流も行われている。



【日本文化紹介】

【算数の展開図の学習】

現地校

小学部はアンネフランク校とヒルテガル校、中学部はセントローレンス校との交流を行っている。お互いの校舎を隔年で訪れ、外国語の

- オランダの社会に適応できずに、オランダでの生活を苦痛に感じている保護者も少なくなく、子どももその影響を受けている。
- 外国語の習熟度に個人差が大きく、コミュニケーションをとることに引け目を感じている。
- 言葉が通じない子との交流に、漠然と恐怖感を抱いている。
- 帰宅後の英会話やオランダ語の会話は保護者が行い、子どもたちが家庭で実践する機会がない。

これらの問題点を踏まえ、「心」と「技能」の両輪を育てていくことをねらいとして、授業改善に取り組んだ。その際にお手本となったのは、オランダの子どもたちの姿であった。

交流に現地校に行くと、みんな笑顔で子どもたちを出迎えてくれ、積極的に手を引き、決して流暢とは言えない英語でまず話しかけてくれる。その姿に、最初は強張っていたロッテルダム日本人学校の子どもの表情にも笑顔がみられるようになり、帰る頃には「楽しかった」という感想が多く聞かれた。



その様子を現地採用のオランダ人英語講師の方に話したところ、オランダの人々が外国の人々との交流に対して大切にしていることや学校教育で学ぶことを教えてくれた。

それらを参考に、「温かい心：Warm Heart」をテーマに全校で授業の改善を進めた。

「Smile (笑顔)」

「Welcome & Thanks (ありがとう)」

「Compliment (いいね)」

「Show interest (知りたいな)」

という4つの態度を土台とし、

「交流に大切な心」＝「Warm Heart」

をテーマとして、子どもへの定着を図った。

また、4つの態度を表現するためには、

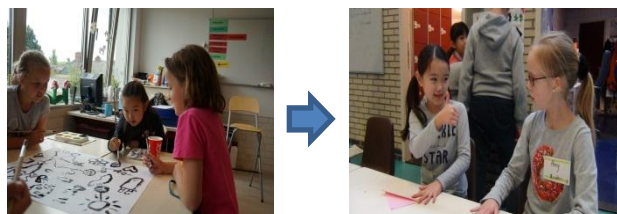
「言語」「ジェスチャー」「表情」

の3つが重要であることも子どもに意識させて、交流活動に臨んだ。



当初は、言語へのコンプレックスを持つ子どもも少なかったが、「ジェスチャー」や「表情」を重視させることで、苦手意識の改善がみられるようになった。

また、コミュニケーションを図った際に、「相手」の表情や言葉、ジェスチャーも意識させることで、「自分の思いが相手に伝わった」という手ごたえを感じ取れる子どもも多くなった。



「言葉が十分ではなくても、コミュニケーションがとれる」という成功体験を積み重ねることが自信へとつながり、次は言葉を増やしたいという意欲につながっていった。

英会話の技能については、現地採用のオランダ人講師の方が個々の習熟に応じて、子どもたちの興味を引き付ける授業を展開して下さっていた。ただ、英会話の授業では積極的な子ども、交流活動などの実践の場では様子が変わり、積極性に欠けるという課題が見られた。そこで、テキストでの学習とは別に、交流の場面で必要な表現などを共に精選し、交流活動との系統性を持たせて学習を進めていくことにした。

学習した言葉が、ジェスチャーや表情とともに

に相手に通じたという経験が、会話の自信へとつながり、英会話の学習に対する態度にも大きな変化がみられるようになった。常に、コミュニケーションを図ることを念頭に置いて学習し、学校の行事や帰宅後の生活の中でも、自分から話しかけてみようとする子が多くなった。

コミュニケーションの能力を支えるのは、「心」と「技能」の両輪であることを強く感じる実践となった。

5. オランダ人の気質と教育

3年間オランダで生活する中で、オランダの人々の「選択を尊重する気質」や、海外の人にも気軽に話しかける「寛容な気質」に触れる機会が数多くあった。

(1) 他者を受け入れる「寛容さ」

オランダ人と触れ合う機会を作ろうと、3年間地元ソフトボールチームに参加してもらった。突然の日本人の訪問にさすがに驚いていたが、すぐにチームに加えてくれた。ひたむきにプレースポーツを楽しむ姿に国境はなく、共に汗を流しながら仲を深めることができた。まさに、オランダ人の寛容さを実感する機会となった。



また、次男は現地校に通うこととなったが、オランダの子どもたちも同様の気質をもっており、最初はオランダの子どもたちと距離感があったものの、周りの子たちから声をかけてもらい少しずつ慣れ親しんでいった。次男が骨折した際に、クラスメイトがお見舞いに来てくれていたが、友だちを思う気持ちもまた、同じだと感じる瞬間だった。



(2) 「選択を尊重する」指導

オランダでは、サッカーが一番人気であり、毎日多くの国民がサッカーをプレーしている。クラブの規模も大きく、小学生以下の子どもからお年

寄りまでが年代や技量別に分かれたチームで、練習や試合を行っている。

チームや構成するメンバーによっても違いはあるものの、共通して見えてくるのは「選択を尊重する」指導方法であった。どんなプレーであっても、子どもが選択したものを否定することは決してなく、サッカーそのものを楽しむことを第一に考えているとコーチも述べていた。

どんな選択も受け入れて否定しない指導方法に違和感があったが、最初は乗り気ではなかった長男が、クラブに通うに連れて好きになっていった要因として、自分の選択で自由にプレーし、それを褒められたという経験が大きな影響を与えた。失敗を恐れずにのびのびとプレーするオランダの子どもたちの姿と、その指導方法から学ぶことが多かった。



(3) 世界に目を向ける教育

オランダの子どもたちは、「選択を尊重する気質」や「寛容な気質」を学校教育や社会教育の中で育てている。子どもたちの幸福度が高いオランダの教育から、選択させることの意義と選択させるための準備の大切さを改めて感じた。

また、日本人学校の子子どもたちとすぐに笑顔で接するオランダの子子どもたちからは「Warm Heart」を学んだ。そして、



温かい心で人と接する態度は、交流の場に限るものではなく、普段の学校生活においても必要なことと言える。普段の生活の中で、「Smile (笑顔)」「Welcome & Thanks (ありがとう)」「Compliment (いいね)」「Show interest (知りたいな)」という4つの態度を育むことが、将来、世界に目を向けて活躍するための土台作りになるのではないだろうか。

今回の派遣中に学んだ、「選択」と「寛容」を意識し取り入れながら、温かい心を育てていけるよう今後の実践を行っていきたい。